

八幡川付近から見た、平沢集落と昭和54・56・59年度に本校「歩く会」のコースとなった道路(右)平沢と山口の境を流れる八幡川。この左方50m上流がかがり場。遠景は山口集落(下)



月刊

A c a n t h u s

(土浦一高・土浦中学とその周辺の物語)

第137号

2020(令和2)年9月8日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
HP <http://www.sin-syu.jp/>

筑波山麓・里山での暮らし 3

子どもたちは、学校や家の手伝いが終わると、家の近い者同士で誘い合い、外で遊び回っていました。年少者は年長者の後に付いて、遊びのルールや自然の営みを学んでいきました。今号では、高21回帰巢(旧姓大久保)茂君に、筑波町(現つくば市)平沢での、子どもの頃の遊びを振り返っていただきました。

【 】内は筆者による注記です。

野山での遊び

浅春、里山に馥郁たる梅の香が漂い始める。至る所でフキノトウ(蔞の蔓)が芽を出します。子どもでも持ちきれないほど採れました。その香気とほろ苦い味とが喜ばれ、大人たちは、焼いたり天ぷらにして賞味していましたが、子どもの中には、その苦味がどうしても馴染めません。しかし、茹(ゆ)でて灰汁(あく)抜きをしたフキノトウを細かく刻んで、焼き味噌や練り味噌に混ぜた蔞味噌は、苦味も薄まり、春一番のご飯の友となりました。

新緑の季節には、ワラビ(蕨)やゼンマイ(薇)、タラの芽などの山菜が採れます。子どもたちは、大人から採り方を教わり、山に入って行きます。タラの芽は天ぷら、ワラビは灰汁抜きが必要である。【ヤゼンマイはお浸しや煮物になりました。また、ワラビ・ゼンマイは、天日干しされ、保存食にもなりました。

夏休みには、昆虫採集で山野を駆け巡りました。虫籠(むしかご)をぶら下げ捕虫網を手に、トンボ(蜻蛉)・セミ(蟬)・カブトムシ(甲虫)・チョウ(蝶)・ガ(蛾)・ホタル(蛍)などを手当たり次第に捕り、標本にし、夏休みの自由研究として提出しました。私たちは、苦労して捕まえたオニヤンマやクワガタ(鍬形)などを自慢し合っていました。

夏休みの私には、密かな楽しみもありました。家の裏の林にツリーハウスを造っていたのです。昼食の後、樹上の小屋に入り、マーク・トウェインの『ハックルベリー・フィン』の冒険の主人公・ハックルベリー・フィンに扮して遊んでいました。一つの間に眠ってしまいました。が、あの心地好さは忘れられません。

秋はキノコ(茸)狩りです。アマタケ・ハツタケ・ホウキタケ。これらは子どもでも直ぐに見分けが付き、みんなど探りに行きました。何年か行くうちに、よく採れる場所が分かってくるが、教え合うことはありません。採れた

キノコは、味噌汁やけんちん汁の具や炒め物として頂きました。中には、塩漬にして保存食にする家もありました。山は、子どもたちにおやつも恵んでくれました。初夏から秋にかけては、クサイチゴ・バライチゴ・モミジイチゴなどの野イチゴが次々と実を付けますが、ヘビイチゴのように苦くて食べられないものもある。子どもたちは「苦い思いをしなから、見分け方を覚えていきまし。夏の終わりに、アケビ(通草)や山ブドウ(葡萄)が熟れてきます。アケビは熟した柿のような味で、山遊びの子どもたちには恰好のおやつでした。

水遊び

春、川や池の水が温んでくると、魚釣りが始まります。堆肥小屋に積んである堆肥の中にはミミズ(蚯蚓)が驚くほど居ます。それを餌に八幡川や近くの農業用の溜池で、フナ(鮒)・オボソ・ヤマベなどを釣っていました。

アメリカザリガニも釣りました。先ず、カエル(蛙)を捕まえます。腿の肉を餌にするため、尻糸(たこいと)の先に餌を縛って放り込むと、餌をハサミで掴んだザリガニが、そのまま吊り上がってきます。ザリガニが捕れれば、その尾の肉が餌になりました。ザリガニは小さい子でも釣れます。釣り針を使っていないので、ハサミを放せば逃げられるのですが、ザリガニたちは何を考えているのか、放す気配は一向にありません。バケツいっぱいになったザリガニは、潰されて鶏の餌になりました。

乗っ込み(産卵)の時期には、雨が降ると、コイ(鯉)やフナ、ウナギ(鰻)が産卵場所に集まってきました。攪網(たもあみ)を持って急ぎました。小川の淀みには産卵を控えたコイやフナがうようよ居ます。攪網で掬いますが、網に収まらないものも居ました。ウナギは滅多に捕れません。母が、鱗と内臓を取り除いて、コイは輪切りにして、フナは丸ごと、大きな鍋で甘露煮にしてくれまし

た。真子【まこ】魚類の腹にある卵。白子(しらこ)に対して言う。】は、子ども同士で取り合いをして食べます。大漁の時には近所へお裾分けもしました。気温が上がると、川に入れるようになる。ドジョウ(泥鰌)やシジミ(蜆)を捕りました。ドジョウは箆(ざる)や篩(ふるい)で、シジミは手で捕ります。ドジョウは逃げますが、逃げ足の速いシジミは居ませんから、見付けさえすれば、小さな子でも捕れます。

上高津貝塚(注1)などの霞ヶ浦沿岸の縄文遺跡から膨大な量の貝殻が出土するのは、当時は海であった霞ヶ浦の魚介類の豊かさを示すものですが、何より、貝類は女性や子どもでも簡単に捕れたことによるのでしょう。

我が家でも、ドジョウはドジョウ汁や柳川鍋として、シジミはシジミ汁として食し、縄文人と同じく、貴重な栄養源となっていました。

真夏には、山口集落との境になっている八幡川で「かがり【川や池の一部を塞ぎ止め、その中の水を汲み出し、魚を捕ること。】柴堰(しばせき)」。【「掻い掘り」などと言う所もある。】「が行われ、掘り」などと言う所もある。】が行われました。全員が裸になって川に入り、土手の石や泥を積み、川の一部を堰で塞ぎます。堰が完成すると、バケツで水を汲み出します。全員泥だらけになって作業を暫く続けると疲れてきますが、大きなコイやフナなどの背鰭(せびれ)が見えれば、もう大騒ぎ。疲れも忘れて力が入ります。一網打尽ではありませんが、堰の中の魚は捕り放題です。コイ・フナ・オボソ・ヤマベからドジョウ・小エビまで。ウナギを捕まえたこともありません。捕れたものが各家庭の食卓に上ったことは、言うまでもありません。

暑さが厳しい日には、近くの溜池や八幡川で泳ぎました。殆どが水泳パンツを持っていないので、下着のまま泳いでいます。水は清流ではありませんが、気になるほどの汚れではありませんでした。

子どもたちは、山や川で遊んでいる中で、遅く生きるのに必要な知恵と技とを身に付けていったのだと思います。

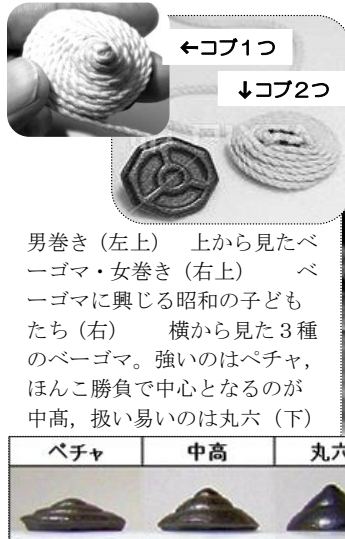
里での遊び

里での面白い遊びの上位3つは、ペーゴマ(注2)・ばあ(県南地方独特の呼称。一般に東日本では面子(めんこ)、西日本ではベツタン。手の平大の厚紙製で円形やカード型があり、表面には、人気漫画・時代劇のヒーロー・プロ野球選手などが多色で印刷されていた)・ビー玉(注3)でした。他に、野球・釘刺し・缶蹴り、隠れん坊・鬼ごっこ・縄跳び・相撲もやりました。子どもたちは暇さえあれば、何かしらの遊びをします。上位の3つは、どれも自分では作れず、町の駄菓子屋などで購入しなければならなかったこと、負ければ自分のものを相手に取られてしまう賭事であったこと、そして何より、高度な技を身に付け勝負に勝つ、という達成感・満足感に、面白さの要因がありました。

ペーゴマは、先ず紐の巻き方から身に付けなくてはなりません。瘤(紐の結び目)が1つの男巻きと2つの女巻きとがあります。巻き終えたら、紐の端を小指に巻きつけて、紐が外れないように、親指と人指し指とでペーゴマを持って、後は回すだけです。これがまた、難しい。バケツや樽に布やシートを張った床(とこ)に放り込んで、その上で回すのです。これで初めて勝負に参加できます。相手のコマを床から弾き出したり、止まったコマをひっくり返したりすれば、勝ちとなり、そのコマを獲得できます。小さい頃は、年長者の勝負を見ながら、毎日、何回も練習しました。初めて勝負に参加して、ペーゴマをぶつけ合った時に出た音は、今も耳の奥に残っています。暗くなつて、ぶつかり合うペーゴマから青白い火花が飛びのを見ると、妖しい陶酔感に襲われました。

賭事ですから、子どもたちは、ルール

の範囲内で秘策を必死で考えました。特に、私たちは、いつでも「ほんこ」真剣勝負。勝者は敗者のコマを取り上げ、自分の物にできる。没収を伴わないものは「ちんこ」勝負と言う。】でしたから、ペーゴマを削り、重心を低くして、相手のコマの下側から攻撃できるように細工をしていました【ペチャという低平なペーゴマも売られていた。】。鏝(やすり)などはありませんので、コンクリートの縁石やブロック塀に擦り付けて削りました。



男巻き(左上) 上から見たペーゴマ・女巻き(右上) ペーゴマに興じる昭和の子どもたち(右) 横から見た3種のペーゴマ。強いのはペチャ、ほんこ勝負で中心となるのが中高、扱い易いのは丸六(下)



ばあでは、地面に置かれた相手のばあに対し、自分のばあをぶつけ、裏返しにしたり、枠で囲った範囲からはじき出したりすれば、それを獲得できます。1回ずつ順番にやっつけていきますが、強いぶつかりを求め、裏に蠟を垂らして滑り易くした子は、見付かり次第に追放処分となりました。子どもたちの間では、汚い手を使うこと・ルール違反をすることが、一番嫌われました。そんな子とは遊ばない、というのが掟となっていました。

かし、追放処分になった子も1週間もすると、赦免されて、また一緒に遊ぶようになり、子どもたちは、遊びを通して、社会のルールとみんなと仲良く暮らすための術とを学んでいきました。

ビー玉には、「目玉落とし」と「三角出し」とがありました。前者は、地面に置いた相手のビー玉に、目の高さからビー玉を落とし、当たれば獲得できます。後者は、地面に描いた三角形の中に数個のビー玉を置き、それらを狙って、少し離れた位置から大き目のビー玉を転がし、枠外に弾き出せば、弾き出した全てを獲得できます。次の起点は転がした玉の停止点で、1回ずつ順番に行っていくます。但し、放った玉が三角形の枠内に停止したら、その人は、その時点で終了となります。

グローブやバットなどを持っている子は殆どいませんが、ゴムボール1つあれば、野球ができました。ゴムボールですから素手でキャッチできますし、バットは木や竹で作りました。物は無くても、身近な物を遊び道具にしています。また、各自が釘1本用意すれば、「釘刺し」(注4)ができましたし、空き缶があれば、寺や神社の境内で「缶蹴り」に夢中になっていました。「缶蹴り」では、隠れる側の子にゲームをリセットできる権利を与えたことが、画期的であったと思います。これで、隠れる側にも、鬼の動きを見て動き回る面白さが与えられ、鬼は隠れた子を探しながらも、缶も守らなくてはならないというスリルも味わえました。人数が多くなつた時には、鬼を2〜3人にしてやっています。「缶蹴り」を考案した人は、遊びの天才ではないか、と思っています。

(注1) 上高津貝塚 桜川右岸の台地上に立地し、4500年〜3500年前の縄文時代中期〜晩期の馬蹄形に広がる貝塚(44, 048m²)。1977(昭和52)年に国史跡に指定された。ヤマトシジミを中心とする貝層からは、マダライヤスズキ(鱸)、シカやイノシシの骨の他に、土器、石器、装飾品などが発見され

ている。ヤマトシジミ・マガイ・スズキなどは海産のものであり、当時は霞ヶ浦が海であったことを裏付ける。竪穴式住居跡・掘建柱建物跡・製塩跡・墓坑なども見付かり、一部が復元整備され、縄文人の生活場面を体感できる。また製塩跡からは当時の交易の様子も窺い知れ、塩を作り、貝を加工(煮て、乾燥させ、干物として保存した。)して交易品とし、黒曜石(石器の材料)などと交換していたようである。

(注2) ペーゴマ(貝独楽、ペイゴマ、パイゴマ) 平安時代に、京都の周辺でパイ貝の殻に砂や粘土を詰め、紐で回したのが始まりとされ、関西から関東に伝わった際に「ペイゴマ」が訛って「ペーゴマ」となったと言われる。大正時代から鋳鉄製の物が作られ、高度経済成長期に掛けて、日本の子どもの遊びに盛んに用いられた。

(注3) ビー玉 ガラス製の玉で、サイズは1.5〜2cm程度。中に模様の入ったもの・大きい玉・小さい玉などがある。

(注4) 釘刺し 適度な堅さの地面(釘を上から投げて刺さる程度)の上で行う。5寸釘が最適。人数は2〜5人。最初に起点を決めるが、それは、ある点だったり、10cm程度の三角形や四角形の角だったりする。続いて順番を決め、相手の釘を囲うように刺していく。刺さった所から、次に刺さった所へと直線を引いていく。失敗して刺さらなかったり、刺さっても他の線と交差したりすると、交代となる。次の者は、相手の行き先を邪魔すべく、線の間を縫うように刺していく。線は必ず直線でなければならず、互いに相手の行く手を塞いで囲い降参させれば勝ちとなる。

